
私的執筆考

花街茂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私的執筆者

【Nコード】

N6372X

【作者名】

花街茂

【あらすじ】

私が今までに書き、そして書く予定の小説についての考察です。作品のあとがき代わりとして読んでいただければ幸いです。

ヴァルキュリア執筆考

当初、この小説を書くにあたって一番に考えたことは「さらっと読める短編を書こう」というものでした。

設定はオーソドックスなファンタジー。流れはこれまたオーソドックスな復讐もの。ここまで決まれば、あとはこの素っ気無い骨組みに肉付けをしていくだけです。

とはいえ、さすがにただ単純なだけのお話では書く側としても面白くありません。

そこで、敵役を少々ひねってみようと考えました。

およそ敵役に似つかわしくないもの。まずはそれをよくよく思い浮かべてみました。

神と戦うなんていうのはいかにもありきたりで陳腐ですし、かといって、天使と戦うなんていったら、それこそ残酷な天使のテーゼでも聞こえてきそうです。

ありがたいことに、世に神話は星の数ほどあります。

この中から敵役候補を選抜しようと取捨選択を行った際、もともと世間的なイメージの中で、敵役が似つかわしくないと感じたのがヴァルキュリアでした。

さて、一般的なヴァルキュリアの印象とはどんなものでしょう？ 私見ですが、恐らく才色兼備の神秘的な女戦士といった感じではないかと思います。

しかし、神話にも描かれている通り、彼女たちには戦場におけるあ

る種の死神としての側面があります。

これはさらに死後、ヴァルホルに向かえ、永遠の命を与えるというおいしい餌によって美化されてこそいますが、所詮彼女たちが不吉な存在であることに変わりはありません。

古今東西、ヴァルキュリアを美化し、正義の側として描いた作品は数知れませんが、私の知る限りでは彼女たちを敵役にして書いた酔狂な作家は思いつきません。

ここに私も満足のいく敵役が誕生しました。

手前味噌ではありますが、私にとってこの小説におけるスカルモールドはとても魅力的な敵役です。

無論、主人公たちの人物像や背景も重要でしたが、私の中ではスカルモールドという敵役を創造できた時点で、この小説はほぼ完成していたといえます。

そしてそれを皆さんにご覧になっていたただけることが、なによりも幸せと感じています。

ヴァルキュリア改訂版執筆考

きっかけはさる知人の方のちよつとした意見でした。

「短すぎる」

ある意味、これは想定外なご意見でした。なにせ私はさらつと読める短編を書こうとしたわけですから。

しかし、人様の意見は貴重です。人間はどう頑張っても主観でしかものを見ることが出来ません。ゆえに、第三者からの客観による指摘はとてもありがたいものです。

早速、私は推敲前の原稿に再度目を通し、削りすぎたと思われる部分を復元、もしくは加筆していきました。

特に知人の方の意見から、主人公バルタの軍時代、グラドの生い立ち、老人との会話などに多く加筆し、最終的には物語のラストまで変えるに至りました。

実際に手を加えてみて感じたのは、確かにこの程度の加筆を行わないと、主人公サイドへの感情移入が難しいなということに気づかされました。

そういった意味でも、知人の方からのご意見はとてもいい勉強になりましたし、また、小説の内容向上にも大きく貢献していただけたことに深く感謝しています。

ただ一点、これは完全な私自身のわがままなのですが、この小説はあくまで短編として書こうと思いついて書いた小説です。ゆえに、短編の域を出ないことを心掛け、なんとか三万文字以下に抑えるようにいたしました。

とはいえ、ラストを変えたことには多少の含みがあります。

お読みになった方ならお分かりと思いますが、もし自分がレギンレイヴルの立場だったとして、同じヴァルキュリアであるスカルモールドを撃退するほどの戦士を見過ごすでしょうか？

皆さんは改変したラストをどう受け止められたか、私は楽しくて仕方ありません。

Nympholic amon執筆考(1)

短編を書いたのだから、次は長編を…というのはなんとも短絡的ですが、一度連載形式で小説を書いてみたいと思ったのも事実でして、そんな思いから書き始めたのがこの作品です。

実を言うと、私はライトノベルというものをあまりともに読んだことがありません。

そして、この小説は私の想像上のライトノベルをイメージして書かれています。

といっても、特に大きな事件や騒動がおきるでなく、ただ平凡な没落貴族の日常が描かれているに過ぎません。少なくとも今のところは。

さらに大きなポイントがひとつ。

主人公はプロローグの時点ですでにその死を確定されています。

これは連載形式で作品を書いていくうえで、作家としてはとても面白い試みです。

何がしかの作品を作ったことのある方ならお分かりになると思いますが、作家は自然、書き続けるうちに自分の生み出したキャラクターに愛着、愛情を抱きます。

いまでこそまだ始まったばかりの小説ですが、今後続けていく過程で、どのように私がキャラクターたちへの愛着を深めるか。それがとても楽しみです。

なぜなら、どんなに愛情を深めたとしても、私は自分自身の手ですでに主人公の死を決定してしまっているのですから、その葛藤たる

やどつなることかと今からわくわくしています。

とはいえ、まだまだ始まったばかりの長編（予定？）小説。
未永く温かい目で見守っていただければ幸いです。

Nympholic amon執筆考(2)

やはり面白いもので、現在第十九部まで書いてみて、そろそろキャラクターそれぞれに対する思い入れが加わってきたのを実感しています。

当初見せていた表面的なイメージに加え、その内面を描写することによって、人物たちが生き生きとして感じられるようになり、筆も自然、軽くなっている気がします。

アモンは登場時の単なる自堕落公爵のイメージに加え、時として人命や他人の名誉のためには感情を高ぶらせる気性を見せ、テオドルは粗暴な性格に加え、実際は根の優しい人格であることを加筆してきました。

アルセイデスに関しては、まだ全体的に謎を残したいという意図から、あえて二人に比べて人間描写をするのを抑えて書いています。

メインキャラクターの三人のほかにも、数こそ少ないものの、書いて楽しかった人物は色々といえます。

オストウムは良くも悪しくも貴族階級のいやらしさを体现したキャラクターでしたし、フューレイはアモンも言っているように、第一印象と実際の人物像がかけ離れていて、書いていて面白い人物でした。アルバインは…そうですね、彼女についてはまた今後話すことにしましょう。

ともあれ、ここまで書いてきたおかげで気の早い話ではありますが作品終了までの全体的な構成が出来上がってきました。

あくまで予定ではありますが、前編として二十部、中編、後編に同

じく二十部ずつ。編ごとに約三万字程度、合計で十万字前後で終わらせようと考えています。

もちろん、単なる予定でありますから、今後の展開によってはどう転ぶか分かりませんが、少なくとも面白い作品にしたいという気持ちだけは変わりません。

いよいよ次回、第二十部をもって前編終了となりますが、どうか皆様にはこれからも変わらずお付き合いをいただければと願う次第です。

Nympholic amon執筆考(3)

気づけば早いもので、すでにこの作品も四十九章を数え、ついに後編に突入となりました。

正直、当初はまさかここまで大変な作業になるとは思っていなかったもので、仕事の合間を縫った執筆はなんとも過酷でした。

とはいえ、好きでやっていることでもあります。そして、それを皆さんが読んでくださっている。

ああ、こんな喜びを知らずに人生を終えるのはなんとつまらないことか！

苦しみがあるからこそ、その後にやってくる喜びはひとしおです。

さて、後編を向かえてついにアモンの物語も三分の一を切ったわけですが、今回はそのアモンについて少しお話したいと思います。

私がキャラクター造形を行う際の絶対条件のひとつとして、「わざと欠陥品を作る」というものがあります。

これは簡単な理由です。

完璧なものに魅力など無いからです。

最近ではひどく完璧さを求める傾向が強く、実際辟易としているのですが、そもそも人の魅力というものはなんでしょう？

その人が完璧だからでしょうか？

人を本当に愛したことのある人なら即答するでしょう。

「違う」と。

人は一人では生きていきません。そして、一人で生きていける人間には愛情は必要無いのです。

なぜなら、愛は人を支え、守り、強くするものなのですから。

ゆえに完璧な人間には愛の必要がありません。愛を注ぐ余地が無い。こんなつまらないことがあるでしょうか。

この物語の主人公であるアモンはまさに欠陥だらけの人間です。

もちろん、好き嫌いの好みが大きく分かれるキャラクターであることはよく理解しています。

でもあえて彼を欠陥だらけにしたのは、ひとえに彼が人の愛を受け止める器たれと願ったからに他なりません。

ある知人のアモンに対する評価は私が望んだ通り、いえそれ以上でした。

「ダメ八割・デキル二割」

私としては大変満足なキャラクター評価です。

ともあれ、ついに物語も終盤。

読者の方々にはどうか最後までお付き合いいただきたいと、心よりお願い申し上げます。

Nympholic amon執筆考(4)

基本的に、小説を書く人というのは言葉遊びが好きなものだとは思っています。

漢字、片仮名、平仮名、各種記号、アルファベットやギリシア文字、キリル文字…etc。

こうしたものを組み合わせて読者の方の想像力を掻き立てる。それが小説の醍醐味だと私個人としては考えています。

そして、その中のひとつの手法が言葉遊びです。

さて、この作品の中にもいくつか、「実はこういう意味だったんだよ」という言葉遊びが含まれています。

もちろん、それを読み解こうとして無理に深読みをする必要はありませんが、いわばこれは作者が読者の方に対して行うちょっとした悪戯のようなものです。

全てをばらしてしまうのは簡単ですが、それではせっかくの遊びが台無しです。

というわけで、ひとつ例として次の文章をご紹介します。

「公爵と使者」における、アモンとフューレイの最初の会話です。

「私はフューレイ・ファルバス。レムレス亜人保護庁付外交特務官という面倒な肩書きのものです」

「確かに、少々長ったらしい肩書きですな」

お気づきでしょうか？

実はこの時点でフューレイの、人の記憶を見る能力はすでに明かされています。

彼は自分の肩書きを初対面のはずのアモンに対し、「面倒」と表現しています。

「面倒」… 手数がかかり、不快なこと。煩雑でわずらわしいこと。

すなわち、アモンの面倒臭がりな性格を、すでに看破した上で彼はこの台詞を口に出しているわけです。

こうした言葉遊びを織り交ぜながら作品を書くのはなんとも「面倒」な作業ではありますが、それも含めて小説を書くという行為の楽しみであると思っています。

はてさて、皆さんは一体いくつの私からの悪戯にお気づきになるでしょうか？

「かくて狂人は悪夢に微笑む」執筆考

いくつかの作品を書いていると、どうしても不出来な作品というものも出来てしまいます。

まあ、だからといって、それ以外の作品の出来がいいかと言われれば、これはもう、一言も無いわけですが…。

さて、今回はその不出来な作品についてのお話です。

現在、私が連載をさせていただいている作品、「Nympholic amon」に関することなのですが、実はこの作品と同時進行で外編を執筆しておりました。

内容としては、作中に出てきたフーレイとアルバインを主人公とし、本編では書ききれなかったアルバインの強さの理由や、フーレイの普段の任務などについて書いています。

正直、ただでさえ毎日更新という無茶をやりながら、わざわざ外編を執筆していたのにはそれなりの理由があります。

理由自体は極めて単純なものです。

同一の作品を長く書き続けるための気分転換。

とはいえ、全く無関係なものを書くとなると、頭の中がこんがらがってしまう危険もあります。

そこでとったのが苦肉の策。外編の執筆です。

しかし、今回ようやくそれを書き終えたところで、思わぬ事態に見舞われました。

面白くないのです。

というより、面白くない以前の問題。

致命的なほどに出来が悪い。これに尽きます。

ですが、だからといってこれ無かったことにして封印するのはあまりにも短絡的です。

しかも、困ったことに知人にはすでにいち早く、外編の執筆を告白してしまっています。

そういった経緯もあり、今回、このあまりに不出来な作品を不本意ながら投稿させていただくことにいたしました。

作者の私自身が言うのはどうにもおかしいですが、はっきり言ってこの作品は駄作です。

読んでも決して得にならないと自信をもって断言できます。

そついったわけですので、これは基本的に自らの未熟を忘れぬための戒めのような作品として投稿するものであり、とてもではありませんが、皆さんには読んでいただく価値はありません。

繰り返しますが、絶対にお勧めいたしませんので、どうか存在しないものと思って扱ってください。

Nympholic amon執筆考(5)

正直なところ、この作品を書き始めた時はまさか自分がこれほどまでに苦しむことになるうとは想像もしていませんでした。

今、この作品の終末部分を書くに至り、私はただ思います。

出来ることならば書くことを止めたい。

出来ることならば安易な初期設定をおこなった自分をやり直させたい。

しかし、現実には道は前方にひとつ限り。

進む以外に選択肢が無いのなら、どれほど苦痛にのた打ち回ろうとも、前進するよりありません。

気の早い話ではありますが、恐らくこれから書くこの作品のラストは、間違い無く賛否が分かれることでしょう。

それでも、あえて私は進みます。

引き返す道はなし。

別の道もどこにもありません。

ただ前に。

前に進み続けること。

それがこの作品を書いた私の責任であろうと今は思っています。

実際、おかしな話です。

楽しみのために書き始めたはずの作品が、よもやこれほどの苦悩を自分にもたらすことになるうとは。

ですが、それもまたある種のめぐり合わせなのでしょう。偶然にも私はそういう縁に導かれた。

運命という言葉が私は嫌いです。

もしも経過や結果が決められた人生があるならば、あえて私はその現実を否定します。

道が前にしかないのなら、それを進むしかありません。その代わり、そのたった一本の道の中で必死に足掻く。それが真に正しい生き方ではないでしょうか。

運命という言葉が私は嫌いです。

それは道の選択肢はおろか、可能性すら放棄した言葉でしかないのですから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6372x/>

私的執筆考

2011年11月17日21時24分発行